

スポーツ、政治、そして詩人たち

(原稿用紙換算三九枚)

村野四郎の「近代修身」を視座に

疋田 雅昭

実は、村野四郎の『體操詩集』には、同時代評としては、従来あまりふれられることのない作者自身による自作解説がある。

この詩集をお読み下さった方には既にお気づきのことと思ひますが、この體操のフォームは前の方と後の方では相当ちがったものを示してあます。

中学生のやうなキチンとしたフォームは次第に大学生のやうな仕様のないフォームを示しはじめてあます。これは勿論年齢のせいもありますが、體操の正課が新たな修身の課題によつておかされてゐることを示すものです。

以前拙論にて『體操詩集』を論じた時⁽²⁾には、詩集が前半部と後半部と二分される作家論的根拠としてこの同時代評をあげたにとどまらず、しかし、ここで「修身」に言及していることは、当時「近代修身」の連作を完結していたことを考えれば作家論的に興味がある言説ではある。『體操詩集』をめぐる村野の動向を現時点で最も詳細な全詩集の年譜により確認してみる。

村野が新即物主義的傾向を示し始めたのは昭和五(一九三〇)年一二月号の「旗魚」の「後記」からであり、具体的詩作としては翌年の「體操」(「旗魚」昭和六(一九三一)年二月)からである。

僕は周圍を無視する／しかも外界は整列するのだ／僕の咽喉は笛だ／僕の命令は音だ

日常生活の中での効用を否定し、人間の運動を出来るだけ抽象的な体系に近づけようとする體操は、身体で表現された抽象美こそが、その価値の全てである。演技者は、自我を抑え、能う限り抽象的な形態美を目指し、観客は、その美に酔いしれる。演技者は、事後的にしか己の美を認識できない以上、原理的に、體操とは演技者と観客により成り立つ空間である。そこにこそ「體操」における詩と写真の邂逅の意味がある。

だが、問題はこうしたモダニズム的な写真と詩との調和関係では説明できない詩篇が後半部に多く現れることである。拙論では、それについて「性」の問題の顕在化という視点で考察したが、問題の本質はそうした作品論的観点に自閉するものではないだろう。そこで、まずこの自作解説の意味を、社会的観点から見直してみようと思つ。

1 戦前のスポーツをめぐる言説

戦前の昭和期の體操教育は、大正一五(一九二六)年の改正教授要目(正式には「學校體操教授要目」)に始まる。これが後の十年あまりの指針となつたわけだが、この要目の特徴としては、各種スポーツが體操科の教材に採用されたことである。これらは、要目上では「遊戯及競技」とされ、「教授上ノ注意」として「體操ト遊戯トハ各固有ノ教育的価値ヲ有スルモノナレバ互ニ相依リ相助ケテ以テ體操科ノ目的ヲ達センコトヲ努メザル可ラズ」とそのバランスの偏重を諫めてゐる。この改正には、当初から「剣道及ヒ柔道」が含まれてはいた

が、指導の内実に関する具体的指示はなく、「適当ナル方法ヲ定メテ之ヲ授クベシ」とされていた。

だが、この改正当時、欧州大戦後のロシア革命などの世界思潮の変動にともない、学生運動は急速に社会主義の実践へと突き進みつつあった。学生連合会、高等学校連盟、学生社会科学連合会と次々と全国組織化されていった学生たちの動向に関して、坂上康博は、大正一四（一九二五）年当時、京都帝国大学教授であった河上肇の興味深い書簡を紹介している。

之（学生運動の弾圧 論者註）に反して、運動家 肉体的運動家の連中は、京大の例の大講堂で数日に亘り歓迎会を受けました。（中略）文部大臣は体育を盛んにすることによつて、国が興ると考えてゐるらしい様子です。この炎天下にベースボールをやる豪傑が国を興すか？ この暑さにマルクスを耽読してゐる病人が社会を動かすか？ 一種反抗競争の気分を以て、私は研究室に籠り、昼は弁当を食べて、朝から夕方まで仕事をして居ります。

河上が公職から放逐されるのは、この三年後のことである。いわゆる「三・一五事件」であるが、教員のみならず、治安維持法によるこの時の大量の学生の検挙は、文部省の教育方針に大きな影響を与えた。

曩時世界ノ大戦アリシ以来、欧州諸国ガ政治経済其ノ他ノ社会状態ニ変革動揺ヲ生ジタルニ伴イ、国家社会ニ対シ奇矯過激ナル新説ヲ唱道スル徒ノナキニ在ラス。（中略）往々国体ニ背キ国情ニ悖ルノ思想ヲ懐抱スル者アルノ傾向ヲ生ジ、学生生徒ノ中ニモ亦之ニ訛惑セラレ、浮華放縱ニ流レ輕挑詭激ニ趨キテ其ノ本分ニ戻リ、甚ダシキハ曩ニ所謂京大事件ニ連座セルアリ

昭和三（一九二八）年四月の文部省訓令である。そして同年に省内の行政機構の一部が改められ、専門学務局から「思想善導」を目的とした「学生課」が独立設置され、直轄学校に学生主事、生徒主事を置くことを義務づけた。六年には学生思想問題調査委員会が設置され、「学生部」は「思想局」に昇格するだろう。

そして昭和三（一九二八）年七月に「知育偏重ノ弊」を取り除くために「在来ノ武道八固ヨリ広ク内外ノ運動種目ニワタリソノ長ヲトリ短ヲ捨テ特ニ精神修養ヲ留意」することが、体育運動審議会第二回総会において議決されている。さらに昭和六（一九三一）年の中学校令施行規則改正においては「剣道及ヒ柔道ハ之ヲ必修セシム」ことになった。同則において文部省はその理由として「質実剛健ナル国民精神ヲ涵養シ心身ヲ鍛錬スルニ適切」であることをあげている。

一方、こうした教育の右傾化に対する教師側の抵抗も存在した。教師の自主的かつ自覚的な教育労働者運動の嚆矢とされる啓明会（大正八（一九一九）年設立）は、昭和五（一九三〇）年には「日本教育労働者組合」となり全国組織化した。昭和七（一九三二）年秋から組織の弾圧が始まり翌八年の長野県での大量検挙、同年一〇月の青森支部の弾圧によつて、運動は終息した。生活綴方運動の影響下にあった北方教育社や教育科学研究会も、同様の弾圧を受けた。

だが、こうした昭和初年代の体操教育の右傾化の流れを行政側からの弾圧の結果と取る歴史観は単純すぎることは言うまでもない。むしろ、民衆側からもそれを支える動向があった。それこそが昭和七（一九三二）年と昭和一一（一九三六）年の二度のオリンピックであるが、これについては、後に詳しく言及することになる。

昭和一二年七月、文部省はそれまでであった思想局を廃止し、新しく教学局を設置したが、後の教育方針は、その年刊行された『国体の本

義』に象徴される、国体明徴の精神を教育内容のうえで実現させることであった。後述するラジオ体操が、国家の身体統制の象徴として本格的に利用されてゆくのもこの頃である。

昭和一五（一九四〇）年に国民体力法が公布され、身体能力の国家管理が公のものとなった。翌年の国民学校令により明治以来用いられてきた「体操」は「体錬科」と改められた。この科の目的は「闊達剛健于心身ト献身奉公ノ実践力ヲ有」する者に育てることである。内容は「体操」と「武道」に二分され、ついに「武道」が総合時間の半分を有するようになった。施行規則によれば、「武道」は「心身ヲ錬磨シ武道ノ精神ヲ涵養スル」ことや「伝統的ナル民族精神」を体得させることを目的としている。

このように考えれば、確かに村野が指摘する『體操詩集』完成までの数年間は、「體操の正課」が新たな精神修養の道具として「おさされて」いった過程であったと言える。むろん『體操詩集』には武道の詩はないから、村野の言説は詩同様、一種のサタイヤとして読むべきなのだろう。だが、逆に考えれば、これはモダニストとしての相当地な政治意識である。それはどついうことか。同時代のスポーツと詩（詞）の関係を通してみればよりはつきりするだろう。

2 オリンピックとテクノロジー

『丹下左膳』の作者である牧逸馬は、昭和七（一九三二）年のロサンゼルスオリンピックが「個人的な競争」から「随分露骨な民族的な競争」になり、「日章旗を掲げて、みんなで君が代を歌い、眼の中が熱くなる機会が増える」と予想していたが、水泳を中心に世界第五位のメダル数獲得をなした結果は、実際、その民族意識を高揚させるにあまりあるものであった。

そこには、ラジオによる「実感放送」（後にその競技を実況しながら

ら放送したもの）や、空輪による写真やインタビューを満載した新聞による連日の報道合戦、ニュース映画の上映などが果たした役割を無視できない。しかし、ここで注目したいのは、こうした報道合戦の中、「東京朝日新聞」が四月一七日の朝刊で告知した「オリムピック派遣選手応援歌」の懸賞募集である。二週間て四万八千あまりの応募があり、結局東京市の中学生齋藤竜の作品が選ばれた。

走れ！ 大地を 力のかぎりノ泳げ！ 正々 飛沫をあげてノ君等の腕は 君等の脚はノ我等が日本の 尊き日本のノ腕だ 脚だ！

「走れ！ 大地を」と題されたこの詞にはすぐに山田耕筰の曲がつき、コロムビアレコードから発売されている。個人の競争する身体が、「日本の」身体に置き換えられている点は、実に見事に牧逸馬らの「期待の地平」（ヤウス）と一致する。同曲は連日ラジオで放送され、スタジアムでの応援で大いに歌われた。ラジオ・文字・写真などによる報道と比べ、歌詞によるナショナルリズムの高揚をねらった応援歌とは、覚えられ、なんども歌われる点で、より深く身体に根ざした戦略なのである。

四年後の昭和一一（一九三六）年元日の「東京朝日新聞」は、「本社の四大計画」の一つとして「オリンピック応援歌詞懸賞募集」を告知した。審査委員は、北原白秋、菊池寛、山田耕筰である。三万七千あまりの応募から、山本槐二という「廿八歳の街の詩人」の詞が選ばれた。

君らが負へる大使命、ノ陽は輝けり 燦々と、ノ勢へよ今ぞ、捷て
選士、ノ制覇を告ぐる 穹の上。ノ あげよ 日の丸 風高く
／ あげよ 君が代 歌高く。

この詞を評価した北原白秋は「応援歌である以上、眼で見るとはなく、耳に訴へるものである」ことを必須とし、「歌脚が揃って覚えやすい」点を評価している。引用した部分は歌詞の三番にあたるが、一番では「あげよ 飛沫の 音高く」など前回のロサンゼルス以来「水泳日本」と称された当時の、ベルリンオリンピックに対する一般人の「期待の地平」を確実に組み込んだ歌詞である。

さらに、このベルリンオリンピックにおける「期待の地平」には、「日本」を強調すべきもつひとつのベクトルがあった。それは、次期オリンピックの招致を東京に実現しようとするものである。実際にどの新聞も、八月までの紙面は、選手の選抜から活躍の予想、東京招致の可否という二つの話題で独占されている。この話題について紙面を追って行くと、ヘルシンキとの五分の争いが続く中、徐々にIOCの有力者の日本びいきが伝えられるかと思いきや、まるでクライマックスに向かうかのように、突然一月前にロンドンが名乗りを上げ、その「卑怯な手段」を非難する紙面上の言説と国際関係上の緊張が重ねられ、東京招致への悲願がより盛り上がるような物語が見て取れる。さらに決定数日前からのカウントダウンが、東京招致の実現の喜びを更に倍増させることになった。開会式以降、ベルリンオリンピックをめぐる言説は、次回は東京かという期待から如何なる東京にするかという新たな「期待の地平」を形成することになったわけだ。

さらに、ベルリンオリンピックは、こつしたロサンゼルス時のメディア戦略の単なる延長にあつたわけではない。ラジオは、「実況放送」から「実況放送」が可能になり、連日十一時から一時間の実況放送と朝六時半から三十分の録音放送を行った。元旦の「読売新聞」は「わが社本年の二大計画」として三日間の「通信空輸」の実現をあげ、実際、写真・ニュース映画等の空輸の速度は以前とは段違いの早さに

なつた。前年三月からは対欧国際電話が開通し、前月から実験を開始した電送写真もぎりぎりの日程で実用に漕ぎ着けた。全ての日本人選手の活躍は翌日には号外で報じられたのである。

オリンピックの翌月、「文藝春秋」に実に詳細かつ辛辣な匿名新聞月評が掲載されている。これによると、電送写真の設備投資には五万四千元もの費用がかかり、一枚の写真の電送に千円の費用がかかる。そこで、各社は、共同で購入し同じ写真を利用することにしたのだが、こつした記事の画一化を、「新聞のラチオ化」と揶揄しているのが、当時の新聞とラジオの関係を知る上でも興味深い。

だが、この電送写真は、実用段階といつても、実際に紙面に掲載されたものを見れば、空輸されたものとは段違いの出来であった。そこで各社はその修正に追われることとなる。その修正をめぐって同月評は以下のように揶揄する。

晴れの開会式の日、ラッセル伯はフロックに勲章をつけて出席したらしいが、朝日はネクタイも折襟も抹殺しガウン様に黒く塗り潰したし、読売は勲章をもぎとつたし、福日に至つてはモーニングを着せるの離れ技を演じた。平生禿げてゐる人が黒髪だつたり、有髭の紳士は無髭だつたり（中略）百鬼夜行！だが、各紙画一的になるのを怖れ、修正氏が愛社精神をもて外科手術したものと褒めて置く。

ほとんど絵のような出来ではない、これらの写真が、写真である根拠は他の空輸写真や事前に用意した写真と併置され、「写真の説明」というキャプションによつて解説されていることだけである。ところが、このキャプションが既に混乱を生んでいる。読売は、ヒトラーの右のモーニングを着た人物をラッセルであるとキャプションを付け、さらに以下の様な記事を掲載している。

四列縦隊の日本男児、日本女性はフイルドの線をふみしめて南側の貴賓席にあるモーニングにシルクハットのヒトラーに、やはりハイル・ヒトラーと手をあげて、しかし一番誇りにみちた行進をしていました。

「読売新聞」昭和一一（一九三六）年八月二日後にふれることになる、西條八十による開会式の感想である。文体からも分るように、これは国際電話の聞き書きであることになっている。実際に現場で開会式を見ていたはずの西條がヒトラーの服装や日本人選手の縦列数を見違はすはずがない。ヒトラーとラッセル伯を勘違いしたのだとしても、読売の写真では、ラッセル伯は確かにシルクハットを手をしているが、モーニングを着ている様には見えない。さらにキャプションによって「ラッセル伯」にされてしまった人物は、明らかにモーニングを着ている。こちらをラッセル伯とすれば、確かに「読売は勲章をもぎとった」ことにもなるだろう。

西條の記事の誤謬は、おそらく記事を書いた人物の加筆によるものだが、その加筆の誤謬の原因は恐らくこの不鮮明な電送写真の修正とキャプションの混乱だったのだろう。つまり、修正された写真の方が「事実」をつくってしまったのである。

3 詩とテクノロジの共犯

ところで、こつしたテクノロジの変化は、ある意味、報道を画一化してしまう側面を持っている。国際電話・電送写真を利用し一刻も早い正確な情報を追い求めた記事は、どの記事も基本的には同じような報道になってしまふ。そこで文学者の現地レポートが、各社の記事の個別化の一端を担うことになったのである。

東京日日は社友の横光利一を、朝日は武者小路実篤を、そして読売は西條八十を特派員として現地に送った。しかし西條は実は朝日とも

契約を交わしていたことが問題となった。結局朝日側のスタッフが、行方不明になった西條を懸命に搜索、読売のホテルに抑えられていた西條を発見し、朝日には散文、読売には詩を書くということで落ち着いた。⁽¹⁾

この三者の記事について、前述した新聞匿名月評が痛烈な批判を加えている。

西條八十の少年倶楽部的感激詩はともかく、武者小路の観戦記は、一体あれあ何だといひたい。スポーツ的でもなく、文学的、新聞的片鱗を持つてもぬない。ただ武者小路実篤といふ名前が情性的に読者の眼を射るのみである。(中略)これに反し東日のは横光ではない。正光を輝かせた観がある。

ここで称揚されている横光の記事は、開会式の模様である。確かに、武者小路、西條の開会式の記事は、開会までの新聞記事と様々な商品広告で繰り返し現れる、「日章旗に象徴される日本」、「日本人の活躍」「東京オリンピック」「感涙」という四つの「期待の地平」をしつかり盛り込んだものである。しかし、横光のものは

日本選手の後半が足が乱れ、踏むべからざる芝生を踏んで行進して来るのを見ると、オリンピック日本招致が選手に与へた影響を思ひやられ手に汗を握るのである。

「東京日日新聞」昭和一一（一九三六）年八月二日と、ただ招致ムードの盛り上がる国内の紙面の中では異質の響きがある。ベルリンオリンピックにおける幾つかの日本人の「美談」が、満州問題における欧米諸国からの反日感情を和らげたが、⁽²⁾棒高飛びにおいて、アメリカのメドウスの一位が決定したのち、西田、大江が同国

人同士の二位決勝戦を放棄し同着による決着を望んだことは、日本でも大きな賛辞とともに報道された。これに関しても横光は、

殊に一昨日の村社と昨日の西田、大江の受けた拍手の波は満場われんばかりである。(中略)明るく照明をつけた底を見下ろす観衆は西田と大江の名ばかり呼び続け、さて愈愈二人が跳ぶ姿勢をとると水を打つたやうに静かになり(中略)私はこれらの情景を眺めつつオリンピックが日本へ廻つて来た日の観衆の態度が、かくの如く公明に美しくあらんことを望んで止まなかつた。

「東京日日新聞」昭和一一(一九三六)年八月七日と、徒に日本人の活躍を評価せず、その観客の態度を評価し、来るべき東京オリンピックにおける日本人の観客としての態度に警鐘を鳴らしている。しかし、横光の現地レポートはこれを最後に終了し、会期の途中で突然打ち切られており、ここから横光の政治性をどこまで評価出来るかは微妙である。これらの記事はオリンピック翌年の四月に刊行される『歐洲紀行』(創元社)に再録されるだろう。

これに対し、「読売新聞」は、八月二日の号外で、以後西條の詩が掲載されることを大きく宣伝し、「漢字の有つ迫力とそれを織りなす平仮名の陰影を心ゆくまでにおく」る為に、電報ではなく最新技術の一つである国際電話によって詩を送ることを西條の写真とともに掲載した。

読売は、この詩と、電送写真・国際電話という最新のテクノロジーを戦略的に利用した。先述したように、電送写真は、基本的に共用の写真であるため、そこに独自性はない。そこに西條の詩を添えることで、見事に他紙との差異化を図ったのである。

八月二日の号外の入場式の写真は、中心に大きな日章旗を掲げた日

本選手団の先頭である。その横には、「祖國を賭ける」という詩が掲載されている。「見よ、来れり、来れり、翩翩としてひらめく日の丸！／男、女、わがなつかしき同胞選手は微笑しつつ来れり」と西條のオリンピック詩の象徴とも言える「日章旗」をうたい、以下の様に続く。

鐵の宰相ヒットラー獅子吼す／五十にちかき體軀より奔しるところの若々しき聲／カーキ色の軍帽を脱するとき、風ありてそのチヨボ髭を揺るがせたり／聽け、湧きたつ歡呼、拍手／ヒール！ ヒール！ ヒール！ ヒットラー！

このヒットラーへの賛辞を後れて来た我々からの一方的な裁断で片づけることはたやすい。だがこの日章旗、日本選手団、ヒットラーという詩の内容は、実はこの詩の下に掲載されたヒットラーの開会宣言の電送写真とも対応しているのである。それだけを抜き出せば到底リアルとは言えない写真と、文学的とは言えない詩、この両者は実は相互補完的なのである。時間、気を盛り込むことでそのリアリティを保証し、日本人選手団を見つめる感慨を「とほく故國の港を眺むる心地なり／聲かけたき、抱きたき、さはれ一瞬にして、一團の姿はわが眼底より群衆の中に消えたり」とうたいあげる西條の詩のショーヴィニスムは、不完全な写真と併置されることにより、メディアが要求する、現地で応援する日本人のあるべき姿を完全に体現していると言える。

五日の記事で、その入賞が報じられた幅跳びの田島は、翌日「あゝ日章旗」という詩で賞賛される。「感謝す田島、君ゆゑに／空より落ちしこの光／あすは謳はん勝鬨の／首途の朝のその光」。表彰台上がる田島の電送写真が掲載されるのは翌日の朝である。

時刻はすでに九時すぎて／夜の闇深しスタディウム／篠つく雨にさ

らされて／寒し 冷し 風荒し。

入賞は確定していたものの、棒高跳びの決勝は夜遅くの決着になり、日本人は翌日の新聞・ラジオで結果を知ることになった。この詩の右には詳しい接戦の様子がレポートされ、下には「残念、寒かった」という見出しで国際電話による西田、大江の談話が掲載されている。「異國人へ^{（こくごくにひと）} もしや／知るも知らぬも口々に／西田、大江の名を呼ぶに／涙は頬を流れたり。」と横光が感じ取った感動を共有しながらも、最後は「寒さと飢えを忘れてはて／藤原義江とわれ二人／闇に唱えし萬歳や／あゝ感慨のスタディウム。」と観客に一体化した感動に包まれており、一貫して観客を客観視していた横光とは対照的である。

八日には高飛びによる日本の日章旗と表彰台上る西田、大江の写真が掲載されている。そして「おゝ月桂樹の冠よ／丘の上の二條の日の丸」という詩が併置され、「見る、赤い夕陽の中に／十萬の觀衆睥睨して揚つた二條の日の丸！」と高揚したナショナルリズムをうたっている。また一二日は、前日のラジオの熱狂的アナウンスで日本全国に伝えられた前畑の平泳優勝の記事とともに、事前に用意していたと思われる前畑の写真が掲載され、「おゝ大和撫子！」という詩が掲載されている。「大和撫子はればれ咲いて／響く君が代ベルリン日本／負けたゲネンゲル優しく抱いて／夢を見るよに聞いている彼女」と前畑のスポーツマンシップを日本女性の美德としてうたい上げているのは、この二人の握手の電送写真が翌日の新聞を飾ることを予告するようである。

だが、こうした西條の詩の政治的ナショナルリズムが最も強く現れたのは、やはり一〇日の号外である。ここでは、一面で二つの大きな電送写真が使われ、孫のマラソン優勝を大きく報道している。

踊れ！ 起て！ 歌へ！ 日本人！／日本は見せた／けふ明瞭^{（ハッキリ）}り見せた／この小男孫のなかに／世界を指導する、躍進日本の勇ましい現在の姿を

「我らの英雄」と名付けられたこの詩は、当時日本の植民地下におかれていたため、「日本」選手として出場せざる得なかつた孫を何の躊躇もなしに「我ら」「日本人」に組み込んでしまい、それを「我ら」の感動の中に回収してしまったのである。これを「まるで『體操詩集』のプレテクストのように」と指摘したのは和田博文であるが、実に慧眼である。この様にして、西條の詩は、最新のテクノロジーであつた電送写真と国際電話によって、相互補完的にその政治性を發揮したのである。

4 ラジオ体操とモダンリズム最後の抵抗

論を村野に戻そう。数少ない同時代評には、『體操詩集』収録の写真に日本人のものが無いことに気が付いていた者もいた。

これは真に審美上から同情に値する。しかしそれだからと言って日本にカメラがないわけでもないのに、複製を使用したといふことは単なる便宜主義に他ならぬ。

「体操する主知」⁽¹⁴⁾

近藤東は、「およそハチマキをしたスポオツマンなどは僕の好む形態ではないので敬遠した」という村野の言説を一応認めた上で、問題の本質を「複製」の是非という倫理の問題に置き換えている。しかし、ここで問題なのは、その問題の本質ではなく、セレクトされる写真の偏向を見抜いた読者の存在である。さらに、村野自身もこの詩集の写真がリーフェンシュタールとウォルフによるものであることを序文で明言している。

そして、詩集刊行からおよそ半年後の昭和一五（一九四〇）年六月、リーフェンシュタールの「民族の祭典」が日本でも公開され、「キネマ旬報」のランキングでもこの年の洋画部門最大のヒットとなった。つまり、詩のほとんどがオリンピック種目で占められ、リーフェンシュタールの映画の映像を多用した結果は、この詩集に必然的にベルリンオリンピックの記憶を呼び込んでしまふ可能性を生んでしまったのである。

敗るとも雖も恥なきを、見よ／時に竿頭高く國旗を掲げしめ／孫や南やよく闘へり。／彼等もの言ふ蘆ら何を競ひ狂ふやと、／囁き交わせる路傍の蘆のそよぎ爽か。

「映畫「民族の祭典」の印象」¹⁶

この映画に魅了された佐藤春夫の詩である。この詩が、西條のそれと相似形にあることは明らかであろう。むろん、村野の「新即物主義」は、こうしたスポーツの持つ政治性には、簡単には回収されないだろう。だが、例えば、以下の詩が何らかのオリンピックの写真と並んでいたらどうだろうか。

だがいまあなたは／笑つて僕と握手をする／あなたにはもう速力もなく／言葉は吃り／思想のタオルを肩から垂らしてゐる

村野は、この詩に何の写真も並べなかった。だが、もしこれが、オリンピックの記憶をめぐる種の政治性を呼び起こすことを避けた措置なのだとすると、何故オリンピックと密接な関連のあるリーフェンシュタールやウォルフの写真を使用し、その写真の出典をはっきりと明記したのか。

むろん、先の村野の自作解説、さらにはスポーツをめぐる同時代状

況を鑑みた我々には、それは、単なる「新即物主義的審美眼の結果」とは思えない。その背景には、抑圧されて右傾化していったスポーツをめぐる言説へのぎりぎりの抵抗があったのではないだろうか。

全詩集の年譜によると、村野はベルリンオリンピックの昭和一一（一九三六）年には、雑誌「新領土」の準備等で作品を発表していない。翌年創刊された「新領土」における村野の仕事の中心は「近代修身」の連作である。「體操詩集」が刊行された昭和一四（一九三九）年は、村野の最後の抵抗の舞台ともいうべき「新領土」は定期的には刊行できなくなっていた。その後村野は昭和一七（一九四二）年一月に第三詩集『抒情飛行』（高田書院）を刊行しているが、ここでは自ら否定していた多くの抒情詩を再び再録し、一九（一九四四）年一月の『故園の葦』（梧桐書院）に至っては親族、知人の死を悼む抒情的な戦争詩をうたい、もはやそこには過去のモダニズムの面影はない。

先の『體操詩集』の自作解説は、作家論的に言えば、こうした時期に書かれた。そして、この「近代修身」にこそ、村野のモダニストとしての最後の抵抗を見るべきだと思う我々は、ここにもう一つのスポーツをめぐる同時代状況を接続してみたいのである。

昭和一二（一九三七）年一月の「新領土」に興味深い三人の編集者、すなわち春山行夫、近藤東、村野の「後記」がある。春山は

今朝は四時半におきて「新領土」の原稿を書く。遠くで軍楽と軍歌が聞こえる。僕の家からナメの裏に当るところに神学校の校舎ができて、六時頃になると賛美歌の合唱があり、朝の説教がある。それからしばらくすると、朝のラヂオ体操である。朝だけでもこれだけ詩の領域が拡大されている。

と先述したラヂオ体操などを自ら描写する音環境の中に取り込む。

このラジオ体操は、黒田勇らの研究¹⁷⁾に詳しいので詳細はさけるが、元来保険局による健康増進運動であったものが、昭和四(一九二八)年に全国放送化された。以後、前述した「思想善導」を目的とする国家の体育政策と結びつき、五(一九三〇)年には「ラジオ体操の会」が発足し、全国規模の団体に成長する。さらに軍部もその重要性に着目し、二二(一九三七)年には「国民精神総動員実地要綱」が發布され、国民身体の統制の象徴として中心的な役割を果たすこととなる。

近藤東は、「現実の強烈さに抵抗する姿勢は諷刺的方法にあるが、それも不安定な状態に至ったならば、作者の意見は、意見として作品の中から姿を消す必要があらう」と、「新しい文学的方法」を述べるのに対し、村野は、ニューカントリー派の紹介も「國際的な文化的仕事」の一つにすぎないとして、「新領土」の政治性を否定する発言をしている。こう言つと、後者は政治的には非常に穏当な立場にあるようだが、村野は近藤が言う姿を消した作者による新しいサタイアを、春山が「擴大」された「詩の領域」とした「ラヂオ体操」を、詩の実作としてうたっているのである。それこそが同号から掲載された「近代修身」の連作なのである。

太陽は見なれた果實である／けたたましいラヂオ体操は／君たちを世界の中へおひ出す／このうるさい雄鷄によつて／君たちは肉體をきたへよ／君たちは手で歩くべきだ／青空を蹴り／つねに墜落のポーズを作り／雲雀を腎部の上方で歌はせよ

「けたたましいラヂオ体操」は、我々を新たな「世界」に誘つてはならない。我々は依然として既存の「世界の中」なのである。新たな世界に行くには「肉體を鍛え」ねばならない。それは「つねに墜落のポーズを作る」為である。新たな「世界」では「太陽」も「青空」も

もはや見上げる対象ではない。

青空を忘れて了へ／かくして清きものを感覺の中に追ひ／鼻と口から悪徳の汁を流してゆけ／とにかく／とにかく／君らの手で地球を支えよ

むろん、ラジオ体操により「肉體を鍛え」ることは、当時の精神修養の道具と化したラジオ体操にも、表面的には望まれている効用であった。同年の体操祭において、鳩山一郎文相は「体育と国家愛」という講演¹⁸⁾を行っている。

体操といふ誰にでも出来る運動を東京から「ラヂオ」を通じてかけられる一つの号令のもとに全国に亘る大勢の人達が打揃つて、規則正しく、而かも活発にやるのでありますから、この体操をしてゐる間は心も身体も全く全国一体となるのであります。

そして鳩山は「民族の眞精神に充滿して全日本の国民が共同一致の行ひ」をすることを体操の眞の目的であるとす。つまり「墜落のポーズ」を勧め「清きもの」を否定することは、決して同時代の「修身」や「體操」の言説ではないのである。にもかかわらず、村野はそうした反逆の行為が実は「手で地球を支え」ていることになるという。これは、明らかに村野の考えるモダニストの「修身」であり、同時代の「修身」へのサタイアである。

寧ろ純粹の影が墮ちてくる君らの上空をながめよ／われらの報國女學生號／われらのあなたが一つの感情の境界を越え／かの汎神論的な空の中に失はれるときこそ／われわれの悲劇はあらゆるものをこえるだらう¹⁹⁾

拙論で村野の詩は常に男性の視線であることを指摘したが、この詩もその点では同様である。そもそも女学生が乗り越えるべき「感情の境界」とは何であるつか。消えるべき「汎神論的な空」とは何であるうか。そこを詩は明示することはない。だが、我らに「純粹の影」を落としてきたものを「報國女學生號」と名付けることにより、この詩は僅かに時代とつながっているのである。

君らは肉體で出来てゐる／しかも君らは責任の眞實を持つてゐる／君らは乾いたペンを擱け／そして彼女の行方をみとゞけよ／彼女の行方をみとゞくべきだ

新しい「修身」として、「報國女學生」に「感情の境界」の主體的な越境を要求する詩人は、同時に男子学生たちに「責任の眞實」を持つてそれを「みとゞける」ことを要求する。

諸君よ／諸君が詩人であるなら／祈りのない音樂に追はれて／ラヂオ體操をする少年たちの／白い肋のために嘆き／鎖を跨いでゆき／空に雲の悶えるのを知りなさい／おお 青年たち／しかも君らは詩人であることを欲するか／しかし それらはみな／近代的ではありえない／君らはむしろ／古い詩人たちを嘆かせなければいけない²⁰⁾

「近代修身」とは、明らかに村野から若い詩人たちへ託したメッセージなのである。「體操をする白い肋の少年たち」が「祈りのない音樂」で強要されるラヂオ體操は、国益という基準でのみ評価される身体への象徴であり、政治的な體操でしかない。時代は、もはや體操も身体も、それを美的にのみ語ることにすら許さなйдらう。

遠い世界からの／か細いホイコットの歌を嗤ひ／機械學會誌の中か

ら／神々の言葉を探し出し／リベットの方法の中に新しい定理を発見したまへ／おお 未来の新しい定理を／発見したまへ

新即物主義の抵抗はここで終わった。むろん、今後我々は詩人の抒情化へのプロセスを詳細に分析する義務があるう。だが、敗れたとは言え、当時のスポーツの言説と対置することより見えてくる、村野の『體操詩集』から「新領土」までの軌跡は、モダニズム最後の抵抗の証として、もっと正當に評価されるべきであろう。村野が次の世代に願いをかけた「新領土」には、既に鮎川信夫も田村隆一も詩的出發を始めていたのだから。『體操詩集』最後の詩は、こう終わっている。

いまや 忍従のアスファルトの下に
ふるき球根を夢見ること勿れ

註

- ① 村野四郎 「感想」 「文芸汎論」 昭和二五(一九四〇)年五月
- ② 拙論 「写真との邂逅、写真の不在、そして避けられる物語」 村野四郎『體操詩集』をめぐって 「日本文学」 平成二二(二〇〇〇)年十一月 33頁
- ③ 岡崎清一郎 『體操詩集』小評 「日本詩壇」 昭和二五(一九四〇)年三月
- ④ 村野四郎 『村野四郎全詩集』 昭和四三(一九六八)年二月 筑摩書房
- ⑤ 『権力としてのスポーツ』(坂上康博・平成一〇(一九九八)年八月・講談社選書メチエ・85頁)。ただし引用は『河上肇より榎田民蔵への手紙』(大内兵衛編・鎌倉文庫・昭和二二(一九四七)年二月・14頁)より。
- ⑥ 牧逸馬 「スポーツ回顧談」 「改造」 昭和七(一九三二)年七月
- ⑦ H・R・ヤウス 『挑発としての文学史』 巒田収訳 岩波書店(岩波モダンクラシックス) 平成二一(一九九九)年七月
- ⑧ 北原白秋 「選後評」 「東京日日新聞」 昭和一一(一九三六)年二月二日
- ⑨ 実際にはロシア上空の飛行許可が下りず実現には至らなかった。

- ⑩ 關無門 「壯絶な空輪リレー」 「文藝春秋」 昭和一一（一九三六）年九月
- ⑪ 朝日新聞百年史編修委員会編 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』 平成七（一九九五）年七月 朝日新聞社
- ⑫ 「国際」オリンピック。競技大会関係雑件第二巻（外務省外交資料館蔵）によると、五千米走の竹中が、一周遅れになりながらインコースを常に開け、最後まで放棄せず完走したことや、総合馬術で城戸が優勝を間近にしながら馬の疲労を気づいてレースを棄権した話などが、排日的なハースト系新聞にまで好意的な記事で紹介されていたという。
- ⑬ 和田博文 「詩と写真との遭遇 村野四郎『体操詩集』成立の文脈」 「日本近代文学」平成二（一九九〇）年五月
- ⑭ 近藤東 「体操する主知」 「新領土」 昭和一五（一九四〇）年二月
- ⑮ 村野四郎 「後記」 「新領土」 昭和一四（一九三九）年二月
- ⑯ 佐藤春夫 「映畫『民族の祭典』の印象」 「日本映畫」 昭和一五（一九四〇）年七月
- ⑰ 黒田勇 『ラジオ体操の誕生』 一九九九（平成一一）年七月 青弓社
- ⑱ 鳩山一郎 「体育と国家愛」 『農村の体育教育』（岩原拓・昭和八（一九三三）年・日本評論社）所収
- ⑲ 「近代修身 廣場に於いて」 「新領土」 昭和一三（一九三八）年一月
- ⑳ 「近代修身 定理について」 「新領土」 昭和一三（一九三八）年五月

詩の引用は全て初出のまま。他の引用の漢字はすべて新体字に統一してある。